

SPPCモデルによる大学生の自己概念の検討

平 松 隆 円

〔抄 録〕

本研究は、次の点を目的とし、大学生762名（男性414名、女性348名）を対象に質問紙調査を行った。すなわち、Harter (1985) のSelf-Perception Profile for Children (SPPC) を用いて日本の青年期の自己概念を検討することであり、要約すると結果は以下のとおりであった。

- 1) 青年期の自己概念の構造として、自己認知的側面の『運動能力』『容姿』『友人関係』『品行』『学業能力』と自己評価的側面の『自己価値』が明らかとなった。
- 2) 『自己価値』形成要因について性差と発達差の観点から検討した結果、性差において、男性では『容姿』『友人関係』『品行』『学業能力』が、女性では『容姿』『友人関係』『学業能力』『品行』が『自己評価』を規定していることが明らかなった。また、発達差において年齢低群では『容姿』『友人関係』『品行』が、年齢高群では『容姿』『友人関係』『学業能力』が『自己価値』を規定していることがわかった。特に、大学生の『自己価値』、すなわち「自分に満足している」「自信がある」などといった自己に対する評価的側面は、性別や年齢に関わらず『容姿』という自己の外見に関する認知的側面により最も強く規定されていることが明らかなった。

キーワード 自己概念、自己認知、自己評価、SPPC、大学生

1 は じ め に

我々は、社会を通して自己に関する知識を蓄積し、自己の能力、行動、性格などを評価し自己の存在を受け入れている。

一般的に、自己に関する概念は自己概念 (self-concept)、それを受け入れることは自己受容 (self-acceptance) と呼ばれる。この自己概念は、自己認知 (self-perception) と自己評価 (self-evaluation) に大別される (山本・松井・山成 1982)。自己認知とは、「スポーツが得意だ」「社交的だ」などといった様々な要素から構成される自己の認知的側面であり、他方、自己評価とは、「自分に満足している」「自信がある」などといった自己に対する評価的側面である。なお、自己受容は自己評価とほぼ同義とされている (Rogers 1949, Silber 1965, 中村・板津

1988)。

人は、他者との相互作用なかで形成した自己認知をどの程度のものであるか、評価している。評価は、ある基準における優劣だけが問題になるのではなく、自己にとってそれが満足できるものか否かが重要となる。

さて、自己認知と自己評価の関係について、沢崎 (1984) は適切な自己評価が行われるためには正確な自己認知が必要であり、両者は相互依存的な関係であると指摘する。そして、白波瀬 (2004) は醜形恐怖症、自傷、摂食障害などの多くは、極端に低くまたは不適切に自己の外貌を認知することにより、自己評価が低くなり自己を受け入れることができず精神病理として発症していると指摘する。

これらの指摘は、自分自身をどのように受け入れ、また安定した自己像が形成されているかについては、自己の適切な認知が重要であるという知見を提供する。もちろん、我々は自己について一つの側面だけを認知しているわけではない。Fromm (1947) は、地位や名誉、経済力や運動能力、学校の成績や友人関係など様々な要素の卓越さを他人に認められ、また自分自身も肯定的に認知することで精神的な安定、すなわち自己評価を高めると指摘する。そのため、自己評価を高める要因としての自己認知については、可能な限り多面的にとらえる必要がある。

2 目 的

本研究の目的は、自己について多面的にとらえているHarter (1985) のSelf-Perception Profile for Children (以下SPPC) モデルにより、大学生の自己概念の構造について検討を行うことである。

SPPCとは、Scholastic Competence (学業能力)、Social Acceptance (友人関係)、Athletic Competence (運動能力)、Physical Appearance (容姿)、Behavioral Conduct (品行) という5つの下位尺度からなる自己認知に関する30の質問項目と、Global Self-Worth (全体的自己価値) という1次元の自己評価に関する6の質問項目から構成されている。なお、全体的自己価値とは他の自己認知的側面とは独立して存在するとされ、ありのままの自己を抑圧・歪曲なしに受け入れることとであり、自己評価を意味している (Harter 1985)。これまで、日本においてSPPCを用いた研究は、児童を対象としたものにいくつかある。

桜井 (1983) は、SPPCのもととなった、Cognitive (学習)、Social (友人)、Physical (運動)、General Self-Worth (全体的自己価値) の4つの下位尺度を構成する28項目からなるPerceived Competence Scale for Children (Harter 1979、以下PCSC) の日本語版を作成し、検討している。その結果、原尺度と共通性の高い日本語版が作成され、学習と全体的自己価値の年齢上昇にとまう単調減少傾向と、運動と全体的自己価値の男女差を明らかにしている。

藤崎・高田 (1992) は、小学生にはSPPCを、成人にはSociability (対人関係)、Job

Competence (仕事)、Nurturance (養育)、Athletic Abilities (運動)、Physical Appearance (容姿)、Adequate Provider (供給)、Morality (道徳)、Household Management (家事)、Intimate Relationships (親密な関係)、Intelligence (知的能力)、Sense of Humor (ユーモア)、Global Self-Worth (全体的自己価値) の12の下位尺度を構成する50の質問項目からなるAdult Self-Perception Profile (Messer and Harter 1986、以下ASPP) を、中学生や高校生や大学生にはASPPのうち対人関係、運動、容姿、道徳、親密な関係、知的能力、全体的自己価値の7つの下位尺度を用いて横断的に発達の変化を検討している。その結果、小学生では全体的自己価値と友人関係、中学生では全体的自己価値と容姿、成人では全体的自己価値と仕事が1つの因子として抽出され、発達段階により全体的自己価値に強く影響している下位尺度が異なることを明らかにしている。また、年齢の上昇により 友人関係、対人関係、親密な関係といった人物との関わりを重要と考え、小学生では友人関係や運動能力、中学生以上では知的能力、運動、容姿、全体的自己価値について男性は女性に比べ有意に高いことを明らかにしている。

前田 (1998, 1999) は、SPPCの日本語版を作成し、それを絵画式に改訂したうえで健康状態の異なる児童で検討した結果、健康上慢性状態にある児童群は対照健康児童群に比べ運動が否定的ではあったものの、その他については有意差がないことなどを明らかにしている。

眞榮城 (2000) は、SPPCの日本語版を作成し、児童期にいる者の自己概念を検討しているが、小学3年生から6年生の群と中学1・2年生の群とのあいだに有意な差があり、自己認知や自己評価が中学1・2年生頃から低下することを明らかにしている。

このように、SPPCは日本において既にいくつかの日本語版が作成され、日本人に適用可能であることが証明されている。そのため、本研究においても、大学生の自己概念を検討するうえ有効であると考えSPPCを用いた。Harterは、青年期を対象とするSelf-Perception Profile for Adolescents (以下SPPA) や青年後期を対象とするSelf-Perception Profile for College Students (以下SPPCS) など幼児から成人まで5種類の尺度を作成している。

本来、大学生の自己概念を検討するならば、SPPAもしくはSPPCSを用いるべきであるが、Harterの各尺度に共通して存在する基本的な自己概念の因子によって構成されているSPPCを用いて検討を行うことで、大学生の基本的な自己概念構造を明らかにしやすく、また様々な発達段階での横断的な比較検討が可能であると考え、本研究ではSPPCを用いた。

さらに、これまで、日本において作成されている自己概念に関する多くの尺度は、当然のことながら日本人のみを対象としており、他国において比較検討された例をみることはほとんどない。しかしながら、SPPCは、スコットランド (Hoare et al 1993)、オランダ (Van Dongen-Melman et al 1993)、アラブ首長国連邦 (Eapen et al 2000)、フランス (Worth-Gavin and Herry 1996) をはじめとする様々な国において、翻訳・比較研究が行われているため。SPPCを用いることで今後、自己概念についての国際的な比較検討が可能であると考えられる。

3 調査の概要

3. 1 調査方法と調査時期

2005年4月から5月にかけて、京都と滋賀にある2つの4年制私立大学の学生を対象に集合法で質問紙調査を実施した。なお、倫理的配慮として、調査票に研究の目的を明記し、調査への回答は任意であり、無記名で個人が特定されることがないことを事前に口頭で説明した。

3. 2 調査対象者

調査対象者の内訳は、男性414人 ($M=19.19$ 歳, $SD=1.40$)、女性348人 ($M=18.95$ 歳, $SD=1.42$) の合計762人 ($M=19.08$ 歳, $SD=1.41$) であった。

3. 3 調査内容

① Self-Perception Profile for Children

SPPC (Harter 1985) の自己認知的側面に関する30項目と自己評価的側面に関する6項目を、大学生に適用可能なように表現を改め翻訳を行い、複数の心理学研究者によって質問項目の同質性を確認した。そして、自分自身の意識のあり方について、「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」までの5件法で回答させ、得点化した。

原尺度では、相反する内容の2項目のうち、いずれか一つを強制選択し (“Some kids..., But other kids...”)、あてはまる程度を2段階で評定する4件法の形式がとられている。しかし、この質問形式は、日本ではあまり一般的ではないと判断し、本研究では5件法を採用した。

② 自尊感情尺度

SPPCの妥当性を検討するため、山本ら(1982)によって、翻訳されたRosenberg(1965)の自尊感情尺度10項目についても同時に調査を行った。そして、自分自身の意識のあり方として「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」までの5件法で回答させ、得点化した。

内的整合性の点から不適切な項目を除去し、「少なくとも人並みには価値のある人間である」「色々な良い素質を持っている」「物事を人並みにはうまくやれる」「自分に対し肯定的である」「大体において自分に満足している」の5項目 ($\alpha=.70$) で質問項目の素点を加算して、その項目数で除する方法で簡便因子得点を算出し、分析テータとした。

③ フェイス項目

年齢と性別、回生を回答させた。

4 結 果

4. 1 因子構造

SPPCの自己認知的側面の因子構造について検討するため、自己認知的側面に関する30の質問項目による因子分析(主因子法)を行った。他の因子に対して負荷量の高かった項目を削除して、再度因子分析(主因子法・Promax回転)を行ったところ、最低固有値1.0を基準に既存の5因子構造が明らかとなった(Table 1)。

すなわち、第1因子には「スポーツならなんでもよくできる」「したことのないスポーツでもうまくできると思う」などからなる『運動能力』、第2因子には「自分の姿が今と違うといいのと思う」「自分の顔や髪などの外見や感じが違っていただいいのと思う」などからなる『容姿』、第3因子には「たくさんの友達がいる」「友達をつくるのが難しいと思う」などからなる『友人関係』、第4因子には「いつも正しいことをする」「とても行儀がよい」などからなる『品行』、第5因子には「宿題やレポートなどの学習課題を行うことは困難(難しい)だ」「学校の勉強やレポートなどの課題を終わらせるのが遅い」などからなる『学業能力』である。

そして、各因子の得点の方向性を正にそろえるため一部の項目の得点を逆転した後、質問項目の素点を加算して、その項目数で除する方法で簡便因子得点を算出し、分析データとした。

Table1 Factor Pattern (Promax) for the Self-Perceptions

	1	2	3	4	5	共通性
【運動能力】						
スポーツなら何でもよくできる	0.85	0.01	0.05	0.01	0.02	0.75
したことのないスポーツでもうまくできると思う	0.79	0.04	0.00	0.11	0.02	0.67
友達よりもスポーツができてと思う	0.77	0.00	-0.07	0.14	0.10	0.64
はじめてするスポーツは上手にできない	-0.72	0.00	-0.05	0.10	0.16	0.45
スポーツはするより見ているほうだ	-0.58	0.01	-0.03	0.29	-0.01	0.31
スポーツがもっと得意だったらいいのと思う	-0.34	0.21	0.10	0.00	0.13	0.23
【容姿】						
自分の姿が今と違うといいのと思う	0.05	0.85	-0.05	0.15	0.02	0.67
自分の顔や髪などの外見や感じが違っていただいいのと思う	0.02	0.69	-0.01	0.12	0.17	0.53
自分の体つきが違っていただいいのと思う	-0.04	0.63	0.06	0.07	0.08	0.43
自分の姿に満足している	0.05	-0.59	-0.01	0.11	0.14	0.40
自分はハンサム・美人だと思う	0.00	-0.50	-0.01	0.33	0.11	0.45
自分の身長や体重に満足している	-0.01	-0.48	-0.03	0.14	0.08	0.26
【友人関係】						
たくさんの友達がいる	0.03	0.07	0.79	0.00	0.08	0.63
友達をつくるのが難しいと思う	0.01	-0.02	-0.68	0.09	0.15	0.40
友達に人気がある	0.02	-0.15	0.45	0.26	0.06	0.44
【品行】						
いつも正しいことをする	-0.08	0.04	-0.02	0.66	-0.16	0.40
とても行儀がよい	-0.06	-0.01	0.04	0.53	-0.07	0.28
こうした方がいいとわかっているように行動する	0.02	0.03	-0.06	0.38	-0.16	0.16
【学業能力】						
宿題やレポートなどの学習課題を行うことは困難(難しい)だ	0.01	0.03	-0.05	-0.10	0.59	0.38
学校の勉強やレポートなどの課題を終わらせるのが遅い	-0.04	-0.11	0.01	-0.21	0.56	0.33
勉強したことをすぐに忘れてしまう	-0.01	0.09	-0.01	-0.09	0.54	0.36
固有値	5.06	2.31	1.67	1.57	1.38	
累積寄与率	24.09	35.07	43.01	50.48	57.04	

次に、SPPCの自己評価的側面の因子構造について検討するため、自己評価的側面に関する6の質問項目による因子分析（主因子法）を行った。その結果、最低固有値1.0を基準に既存の1因子が明らかとなった（Table 2）。

すなわち、「今のままの自分に満足している」「一人の人として自分に満足している」などからなる『自己価値』である。

そして、因子の得点の方向性を正にそろえるため一部の項目の得点を逆転した後、質問項目の素点を加算して、その項目数で除する方法で簡便因子得点を算出し、分析データとした。

Table2 Factor Pattern for the Self-Evaluation

	1	共通性
【自己価値】		
今のままの自分に満足している	0.73	0.53
一人の人として自分に満足している	0.72	0.53
自分の生き方が好きではない	-0.60	0.36
自分のような人が好きだ	0.54	0.29
自分を不満に思うことがある	-0.46	0.21
多くのことをするときの自分のやり方に満足していない	-0.44	0.19
固有値	2.71	
累積寄与率	45.24	

4. 2 信頼性

因子分析により明らかとなった各因子について信頼性を検討するため、内的一貫性を推定するCronbachの α 係数を算出した（Table 3）。

その結果、『運動能力』が0.82、『容姿』が0.80、『友人関係』が0.67、『品行』が0.55、『学業能力』が0.61、『自己価値』が0.75であった。

すなわち、Cronbachの α 係数は0.55～0.82とおおむね妥当な値を示しており、信頼性のあることが確認された。

Table3 Subscale Reliabilities

	α
運動能力	0.82
容 姿	0.80
友人関係	0.67
品 行	0.55
学業能力	0.61
自己価値	0.75

4. 3 相関関係

自己認知的側面に関する各因子と『自己価値』との関連性を検討するため、Pearsonの相関係数を算出した（Table 4）。

その結果、全ての組合せで0.1%水準の有意な正の相関を示した。多くが軽度の相関（ $r=.29$

～.39, $p<.001$)であったものの、特に『容姿』と『自己評価』で、中程度の相関を示した ($r=.57, p<.001$)。

すなわち、『運動能力』『容姿』『友人関係』『品行』『学業能力』の認知の高い者は、『自己価値』が一層高い傾向にあった。

Table4 Correlation between Subscale

	運動能力	容姿	友人関係	品行	学業能力
自己価値	0.29 ***	0.57 ***	0.39 ***	0.34 ***	0.36 ***

*** $p < .001$

4. 4 自尊感情との関連性

SPPCの各因子とRosenbergの自尊感情との関連性を検討するため、Pearsonの相関係数を算出した (Table 5)。

その結果、全ての因子で0.1%水準の有意な正の相関を示した。多くが軽度の相関 ($r=.23 \sim .48, p<.001$)であったものの、特に、自尊感情と『自己評価』で強い相関を示した ($r=.61, p<.001$)。

すなわち、『運動能力』『容姿』『友人関係』『品行』『学業能力』『自己価値』高い者は自尊感情が一層高い傾向にあった。

Table5 Correlation between Rosenberg's Self-Esteem and SPPC Subscale (Pearson)

	運動能力	容姿	友人関係	品行	学業能力	自己価値
自尊感情	0.23 ***	0.41 ***	0.48 ***	0.32 ***	0.27 ***	0.61 ***

*** $p < .001$

4. 5 性差と発達差の検討

大学生におけるSPPCの変化を性別と年齢の観点から検討するため、調査対象者を男女別の2群、また1回生でかつ18歳の年齢低群と4回生でかつ21歳の年齢高群という2群に分けた。そして、SPPCの6因子を従属変数とし、性別と年齢を独立変数とする2要因の分散分析を行った (Table 6)。なお、下位検定はBonferroniの多重比較により行った。

その結果、性別では『運動能力』や『容姿』で0.1%水準の、『品行』で1%水準の、『学業能力』や『自己価値』で5%水準の有意な主効果がみられた。すなわち、男性は女性に比べ『運動能力』『容姿』『品行』『学業能力』『自己価値』が一層高かった。年齢別では、『学業能力』で1%水準の、『容姿』で5%水準の有意な主効果がみられた。すなわち、年齢の高群は低群に比べ『学業能力』『容姿』が一層高かった。性別と年齢の交互作用では、『容姿』が0.1%水準で有意であり ($F(3,376)=14.77, p<.001$)、男性の年齢低群や男性の年齢高群は女性の年齢低群に比べ、『容姿』が一層高かった。『運動能力』が1%水準で有意であり ($F(3,376)=5.33, p<.01$)、男性で年齢高群

は女性で年齢低群に比べ、『運動能力』が一層高かった。『品行』が1%水準で有意であり ($F(3,376) = 5.19, p < .01$)、男性の年齢低群は女性の年齢低群に比べ、『品行』が一層高かった。『学業能力』が1%水準で有意であり ($F(3,376) = 4.47, p < .01$)、男性の年齢高群は女性の年齢低群に比べ、『学業能力』が一層高かった。『自己価値』が1%水準で有意であり ($F(3,376) = 3.96, p < .01$)、男性の年齢低群や女性の年齢高群は女性の年齢低群に比べ、『自己価値』が一層高かった。

Table6 Gender and Age Effects (ANOVA)

		運動能力		容 姿		友人関係		品 行		学業能力		自己価値	
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
性別	男性	2.89	0.86	2.53	0.81	3.03	0.86	2.93	0.77	2.59	0.92	2.83	0.76
	女性	2.54	0.95	2.11	0.79	3.05	0.86	2.78	0.64	2.44	0.85	2.68	0.75
	<i>F</i>	24.54	***	46.43	***	0.12		7.59	**	4.48	*	6.64	*
年齢	低群	2.67	0.94	2.24	0.81	3.11	0.83	2.84	0.74	2.45	0.86	2.72	0.71
	高群	2.87	0.93	2.47	0.82	3.16	0.85	2.93	0.72	2.84	0.89	2.89	0.80
	<i>F</i>	2.55		4.46	*	0.24		0.71		11.19	**	2.89	
性別×年齢	男性×低群	2.82	0.86	2.54	0.81	3.14	0.86	3.02	0.82	2.53	0.92	2.85	0.70
	男性×高群	3.12	0.86	2.56	0.79	3.16	0.78	2.91	0.79	2.88	0.88	2.79	0.72
	女性×低群	2.55	0.99	2.00	0.72	3.08	0.82	2.70	0.64	2.39	0.80	2.62	0.70
	女性×高群	2.54	0.95	2.35	0.85	3.16	0.94	2.94	0.64	2.78	0.92	3.01	0.89
	<i>F</i>	5.33	**	14.77	***	0.21		5.19	**	4.47	**	3.96	**

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

4. 6 自己価値形成要因の検討

『自己価値』の形成要因について性別と年齢の観点から検討するため、男女別・年齢の高低群別にStepwiseの変数選択法を用いた重回帰分析を行った (Table 7)。

Table7 Summary of Multiregression Analysis (Stepwise)

	男 性	女 性	年齢低群	年齢高群
運動能力				
容 姿	0.40 ***	0.48 ***	0.46 ***	0.49 ***
友人関係	0.21 ***	0.28 ***	0.24 ***	0.27 **
品 行	0.19 ***	0.09 *	0.16 ***	
学業能力	0.18 ***	0.17 ***		0.28 **
<i>R</i> ₂	0.42 ***	0.49 ***	0.40 ***	0.50 ***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

その結果、男性では『容姿』『友人関係』『品行』『学業能力』が0.1%水準で有意に選択され、女性では『容姿』『友人関係』『学業能力』が0.1%水準で、『品行』が5%水準で有意に選択された。年齢低群では『容姿』『友人関係』『品行』が0.1%水準で有意に選択され、年齢高群では『容姿』が0.1%水準で有意に選択され、『友人関係』『学業能力』が1%水準で有意に選択された。

すなわち、性別や年齢に共通して『容姿』が『自己価値』に最も強い影響力をもっていた。

5 考 察

5. 1 自己概念の構造

SPPCを用いて、大学生の自己概念の構造を検討したところ、原尺度と同様な因子構造が確認された。 α 係数は、本尺度において『品行』『学業能力』がさほど高くはなかった。しかしながら、原尺度 (Harter 1985) の α 係数においても、『学業能力』は0.82、『友人関係』は0.78、『運動能力』は0.83、『容姿』は0.79、『品行』は0.75、『自己価値』は0.81を示して (Harterは4つのサンプルの α 係数を算出しているため、その平均値を記載した) おり、原尺度においても『品行』は他に比べ α 係数が低い結果となっている。そのため、『品行』については原尺度も含め質問項目が適切ではないことも考えられるが、その他にも文化差や時代差といったものが影響していると考えられる。すなわち、『品行』を構成する質問項目での正しさや行儀といったものは様々な文化や時代により、その基準が異なってくることが考えられるからである。今後は、『品行』『学業能力』を含めより妥当な尺度項目の選定が必要である。

また、Rosenbergの自尊感情尺度との関連において、SPPCの全ての因子と正の有意な相関が確認され、特に『自己価値』と高い相関を示したことから、収束的妥当性が認められた。

5. 2 自己概念の変化

大学生の自己概念の変化を検討したところ、性差において、男性は女性に比べ『運動能力』『容姿』『品行』『学業能力』『自己価値』をより認知していることが明らかとなった。この結果は、藤崎・高田 (1992) の中学生以上では知的能力、運動、容姿、全体的自己価値について男性は女性に比べ有意に高いという結果を支持するものとなった。

また発達差において、年齢の高群は低群に比べ『学業能力』『容姿』をより認知しているということが明らかとなった。眞榮城 (2000) は、小学3年生から6年生の群と中学1・2年生の群とのあいだに有意な差があり、自己認知や自己評価が中学1・2年生頃から低下することを明かし、藤崎・高田 (1992) は、知的能力や学業、容姿について小学生から中学生へと低下し、高校生から大学生へと再び上昇するU字型の変化を明らかにしている。これは、Piers & Harris (1965) の、男女とも12歳頃の自尊感情得点が最も低く、その前後が高いU字型の変化を示すという結果を支持するものであるが、本研究においても、大学生が『学業能力』『容姿』が年齢の上昇とともにより認知していることが明らかとなったことから、中学生以降に年齢が上昇するにつれ、再び自己概念の諸側面が上昇していくという結果を支持するものとなった。しかしながら、藤崎・高田 (1992) は道徳 (品行) については、年齢に比例して単調に上昇すると明らかにしていることから、この点について今後多様なサンプルを対象としての詳細な検討が必要である。

5. 3 自己価値の形成要因の検討

『自己価値』の形成要因としての自己認知を検討した結果、特に性別や年齢の高低群に関わらず共通して、『容姿』が最も高い影響力をもっていることがわかった。神山・牛田・耕田(1987)は女子大学生を対象に、自己の身体に満足している者ほど自分自身に対しても満足しているという調査結果を明らかにしているが、本研究は、その結果を支持するものとなった。また、眞榮城(2000)は、児童期の自己評価的側面の形成要因を検討した結果、年齢や性別に関係なく容姿が最も高い影響力をもっていることを明らかにしており、年齢に関わらず『容姿』の高さが『自己価値』を規定する重要な要因であることが明らかとなった。

男性や女性、年齢の低群では『容姿』の次に『友人関係』が『自己価値』に高い影響力をもっていることがわかった。『友人関係』が『自己価値』に影響力をもつ理由は、Havighurst(1953)の青年期の発達課題に「同年の男女との洗練された新しい交際を学ぶこと」が示されていること、さらに、年齢の低群が入学したての18歳、年齢の高群が卒業を控えた21歳であったことを考慮すると、大学生になったことで学校、アルバイト、クラブ・サークルなど友人を獲得する機会が増えること(総務庁 1994)により、新しい人間関係に対する成功が『友人関係』の高い認知として『自己価値』に影響しているのではないかと推察する。松井(1990)や落合(1989)は、友人がいないことが多くの不適応をまねき、精神的健康には充実した友人関係が必要であると指摘しているが、本研究の『友人関係』の高さが『自己価値』に影響するという結果によって、それらが裏付けられた。

『学業能力』は、『自己価値』に対して年齢の低群ではまったく、その他についても年齢の高群を除いてあまり影響力をもたないことが明らかとなった。その理由として、小学校・中学校・高等学校では、期末テストや学力テストなどを通して親や教師など周囲の他者から学業能力について評価を受ける機会が多い。しかしながら大学生では、受験への不安は解消され、他者から成績に対する評価を受ける機会も減る。すなわち、大学生は学業能力を認知する機会そのものが減少するため、『自己価値』への影響があまり高くないのではないかと推察する。そして、年齢の高群において『学業能力』が『自己価値』に影響力をもつ理由として、就職試験や卒業試験など再度、学業能力について評価される機会が増えるためではないかと推察する。

『品行』は、男性や年齢の低群では『友人関係』の次に『自己価値』への影響力を示したものの、年齢の高群では自己評価への影響力はみられず、また女性においても影響力は軽度であることがわかった。その理由として、Kohlberg(1969)の人間は道徳的判断が3水準6段階の順序で発達するという道徳性発達理論が挙げられる。山岸(1985)は日本人を対象として道徳性発達理論を検討した結果、多くの場合、小学生・中学生・高校生は「よいあるいは正しい行為を遂行し、他者からの期待を維持すること(第2水準)」に道徳的判断の基礎がおかれる「他者・よい子への志向(第3段階)」であり、大学生は「共有される規範・権利・義務に同調すること(第3水準)」に道徳的判断がおかれる「契約的違法的・良心志向(第5段階)」であり、

発達にともない上位段階に移行すると指摘している。すなわち、Havighurstの発達課題に「行動の指針としての価値や倫理の体系を学ぶこと」が示され、行動の指針としての価値や倫理の体系を学ぶとされているものの、発達差として他者を喜ばせたりすることへの志向である「他者・よい子への志向（第3段階）」にいる者（小学生・中学生・高校生）ほど『品行』という道徳的日常行動が導く報酬、すなわち他者からの肯定的評価のフィードバックにより『自己価値』を高めるため、『品行』の高さが『自己価値』を高める要因となるが、上位の発達段階にいる者（大学生）ほど『品行』は大多数の意思と幸福への義務となり、肯定的認知は当然のこととしてあまり『自己価値』に影響していないのではないかと推察する。

『運動能力』は年齢別・男女別とも、その影響力はみられなかった。齊藤（2002）によれば、体力や筋力などは12歳頃に急激な伸びを示し、男性は18歳、女性は19歳にピークに達し、以後、微減もしくは一定の水準を保つといわれている。しかしながら、近年では体力の低下傾向が児童期から指摘されており、大学生においても体力の低下を推察する。また、大学生活では、それまでの学校教育とは異なり、体育など自己の運動能力を示す機会が少ないため、『自己価値』を高める要因とならないのではないかと推察する。

6 ま と め

本研究では、HarterのSPPCモデルを利用して、大学生の自己概念について検討を行った。その結果は要約すると、次のとおりである。

自己認知の構造として、既存の『運動能力』『容姿』『友人関係』『品行』『学業能力』の5因子、自己評価の構造として既存の『自己価値』の1因子が明らかとなった。

『自己価値』形成要因について性差と年齢差の観点から検討した結果、性差において、男性では『容姿』『友人関係』『品行』『学業能力』が、女性では『容姿』『友人関係』『学業能力』『品行』が『自己評価』を規定していることが明らかになった。また、年齢差において年齢低群では『容姿』『友人関係』『品行』が、年齢高群では『容姿』『友人関係』『学業能力』が『自己価値』を規定していることがわかった。

大学生の『自己価値』、すなわち「自分に満足している」「自信がある」などといった自己に対する評価的側面は、性別や年齢に関わらず『容姿』という自己の外見に関する認知的側面により最も規定されていることが明らかとなった。

今後は、本研究で得られた知見をもとに、様々な発達段階にいる者を対象としての横断的な検討、また国際な比較検討などを行いたい。

謝 辞

原尺度の使用・翻訳を許可し、有益なコメントをくださいました米国デンバー大学Susan Harter教授、また日頃ご指導ご鞭撻くださいます佛教大学山崎高哉教授に深く感謝いたします。

〔参考文献〕

- Eapen, V., Naqvi, A., & Al-Dhaheer, A. 2000 Cross-cultural validation of Harter's Self-perception Profile for Children in the United Arab Emirates, *Annals of Saudi Medicine*, **20** (1), 8-11
- Fromm, E. 1990 (原著1947) Man for Himself: An Inquiry into the Psychology of Ethics, Henry Holt & Co.
- 藤崎真知代・高田利武 1992 児童期から成人期にかけてのコンピテンスの発達の変化、群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編、**41**、313-327
- Harter, S. 1979 Perceived competence scale for children, University of Denver
- Harter, S. 1985 Manual of the Self-Perception Profile for Children, Denver University
- Havighurst, R.J. 1953 Human Development and Education, Longmans Green & Co
- Hoare, p., Elton, R., Greer, A., & Karley, S., 1993 The Modification and Standardization of the Harter Self-Esteem Questionnaire with Scottish School Children, *Eur Child Adolesc Psychiatr*, **2** (1), 19-33
- Kohlberg, L. 1969 Stage and sequence: The cognitive developmental approach to socialization., In D. A. Goslin (Ed.), *Handbook of socialization theory and research*, Rand McNally, 347-480
- 神山進・牛田聡子・栢田庸 1987 自己と被服の関係 (第2報)、繊維製品消費科学、**28** (11)、77-84
- 前田和子 1998 日本語版学童用自己概念測定尺度の作成と標準化 - Harterモデルの日本への適用、お茶の水医学雑誌、**46** (2)、113-123
- 前田和子 1999 学童の健康状態と自己概念、お茶の水医学雑誌、**47** (2)、55-66
- 眞榮城和美 2000 児童・思春期における自己評価の構造、応用社会学研究、**10**、63-82
- 松井豊 1990 友人関係の機能、齊藤耕二・菊池章夫 (編)、社会化の心理学ハンドブック、川島書店、283-296
- Messer, B. & Harter, S. 1986 Manual for the adult self-perception profile, University of Denver
- 中村昭之・板津祐己 1988 自己受容性の研究-文献研究と文献目録、駒沢社会学研究、**20**、131-171
- 落合良行 1989 孤独感の内包的構造に関する仮説、教育心理学研究、**30**、233-238
- Piers, E.V. & Harris, D.V. 1965 Age and correlates of self-concept in children, *Journal of Educational Psychology*, **55**, 91-95
- Rogers, C.R. 1949 The attitude and orientation of the counselor in client centered therapy, *Journal of consulting Psychology*, **15**, 82-94
- Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image, Princeton Univ. Press
- 齊藤誠一 2002 青年心理へのアプローチ、落合良行・伊藤裕子・齊藤誠一、青年の心理学、有斐閣
- 桜井茂男 1983 認知されたコンピテンス測定尺度 (日本語版) の作成、教育心理学研究、**31**、245-249

沢崎達夫 1984 自己受容に関する文献的研究 (1)、教育相談研究、**22**、59-67

Silber, E & Tippet, J.S. 1965 Self-esteem: clinical assessment and measurement validation, *Psychological reports*, **16**, 1017-1071

白波瀬丈一郎 2004 美と思春期、こころの科学、日本評論社、**117**、14-18

総務庁青少年対策本部 1994 世界の青年との比較からみた日本の青年、大蔵省印刷局

Van Dongen-Melman JEWM, Koot HM, Verhulst FC, 1993 Cross-cultural validation of Harter's Self-perception Profile for Children in a Dutch sample, *Educational and Psychological Measurement*, 739-752

Woth-Gavin, D.A., & Herry, Y. 1996 The French Self-Perception Profile for Children, Score Validity and Peliability, *Education Psychological Measurment*, **56** (4), 678-700

山岸明子 1985 日本における道徳判断の発達、永野重史 (編)、道徳性の発達と教育-コールバーグ理論の展開、新曜社、243-276

山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造、教育心理学研究、**30**、64-68

ABUSTRACT

A questionnaire survey had been conducted of 762 (male: 414, and female: 348) university students for the following purpose. It was to make clear that the consideration of structure for self-concept by Harter's Self-Perception Profile for Children (SPPC). Major finding obtained were as follows:

1) "Scholastic Competence", "Social Acceptance", "Athletic competence", "Physical Appearance", "Behavioral Conduct", "self-evaluation" as the structure of self-concept were revealed by the factor analysis.

2) In male students, it became clear that "Physical Appearance", "Social Acceptance", "Scholastic Competence" "Behavioral Conduct" specifies "self-validation". In female students, it became clear that "Physical Appearance", "Social Acceptance", "Scholastic Competence", "Behavioral Conduct" specifies "self-evaluation". In young students, it became clear that "Physical Appearance", "Social Acceptance", "Behavioral Conduct" specifies "self-validation".

In old students, it became clear that "Physical Appearance", "Social Acceptance", "Scholastic Competence" specifies "self-evaluation".

KEYWORDS : Harter, self-perception profile for children, male and female difference, university students

(ひらまつ りゅうえん 教育学研究科生涯教育専攻博士後期課程、国際日本文化研究センター共同研究員)

(指導：山崎 高哉 教授)

2007年10月3日受理

